017　高島トレイル-Ⅱ　010319
◎そういえば、オレの持っている山の道具は、ほとんどが四半世紀前の品物、山の知識も四半世紀前の情報、今は、山の道具もそれぞれに進化していっているらしく、今どきそんなと笑われるかもしれない。最近は若い方々も山に登ってくる、服装も装備もなかなかに格好がいい。スマホの地図を見ながら歩いている。
◎陽はなかなか射し込んでこないねと思っていたが徐々に青空が現れだした。飯が終わり歩きはじめると空気の色が明るくなりだした、半分ぐらいだけれど青空も見えている、真っ白い雪がキラキラ輝く、雪目になるほどじゃ、雪で顔が焼けるほどじゃないけれど、久しぶりの雪の中の快晴になってきた。昔信州の山の中、ＧＷのころだと思うが太陽が照り付ける中一日行動をした。なんと顔が腫れ上がってしまった、翌日は情けない顔をして坑道を続けたのか、帰ったのか忘れてしまった。それ以降、日焼け止めクリームは離せないといつもザックに入れていたが、一年中河原を走るようになって、オレの顔も一年中黒い、一年中黒いと、たった一日の日焼けぐらい何ともなくなった。
◎またまた雪がでてきたのでワカンを装着。ワカン、昔は持ってなかった、信州の山ではほとんど必要がなかった。昔、故阪口さんが、北八ヶ岳に持参していた、それを借りて歩いてみたことがあった、「なんだ　楽しいおもちゃ」と思った。同じ日に、クロスカントリー用スキーを借り、白駒の池を一周した、これも楽しい思い出。関西の山は、「そらあ　ワカン　ですよ」と皆さんおっしゃるように、くつが潜る、体力が消耗する、時間がかかる、低い山の雪の中ではワカンは必需品、今日もこれをつけて歩くと、一歩一歩が雪を踏みしめ、歩き方も変わってくる、楽に歩けるのである。
◎芦原岳：840Ｍと書いてある、ここは並行に走っている鉄塔の敦賀寄りのもの、ポコリンと大きく広がる鞍部のてっぺん、日が照り雪が輝き、広々とした大地の上、気持ちがいい場所だ。前の方向こうの山にレーダーアンテナが見える、そこに向かって下っていく、ワカン装着のまま雪の斜面をふわりふわりだ。
◎すぐそこに見えた電波塔だが、山のかげに隠れて見えなくなる、けっこう遠いなと思いつつ、一歩一歩。
◎汗をかきながら電波塔までやってきた。ここはこの電波塔に来るための道やら駐車場があるらしいが、雪に覆われその姿が想像できない、ガードレールが見えたり、電信柱が並んでいたり、雪がなければ都会に近い里山なのかもしれない。一つは関西電力の電波塔、もう一つはどこのものかな。電波やレーダーの知識が全くないので、あの丸いお椀がどう作用するものやら、なにを運んでいるのやら、皆目わからない。
◎目的地の乗鞍岳はもう一つ向こうのポコリンだそうで、電波塔のそばにザックを置き空荷で向かう。またまたワカンのままふわりふわりと下の方へ、登り返しててっぺんを目指す、遠くに見えてもこの距離は近い、20分ぐらいですぐに到着した。雪に覆われ道はまったく見えない、おおよそここをまっすぐ下ればよし、登りは樹々が邪魔をして、右へ左へ枝をつかみ木を避けて登っていく。昔、鉄塔があったというコンクリートの建物、あとは雪に埋もれて何もない。下を見ると、雪の中に標識が顔を出している。乗鞍岳：865Ｍと書いてある。ますます琵琶湖がすぐそこに、竹生島が見える、下には国境スキー場が見える、大きな駐車場に何台か止まっているが、ゲレンデでスキー客が滑走しているさまは見えない。
◎3：30 さあ下りましょう、今日は予定通りに歩けた、完走できた、下りは林道だけれどショートカットしてその間を下れたらいいのですがと歩き出した。まずは歩き出すと古い足跡がある、この方もショートカットをしておられるとどんどん下った。途中で林道に出た。「あれれ　これはクマさんに　ちがいない」と足跡を発見。オレのこぶしぐらい、先が三つに割れ、爪のあとがくっきりついている、しばらくして山の方に消えている。「あれはクマに違いない」と思った。物知りの親爺が出てきて、「いやちがう・・」と講釈たれなさるのも聞きたくないし、ええい熊にしておこう。
◎斜面を下り、林道に出る、また斜面を下り、林道に出る。獣除けの網が張ってあるのを乗り越えたり、ロープを外して結びなおしたり、だんだん村に近づいてきた。さあ在原村に着いた、あとは1時間、車まで歩きましょうと歩く。振り返ると電波塔がすぐそこに見える、ここは鄙びた村、20,30 軒ぐらいの家が在るかな、廃屋もいくつかみられる。5：30 に車まで帰ってきた。家に帰り着いたのが8時過ぎだった。

018　熊　040319
山崎晃司著＜ツキノワグマ-すぐそこにいる野生動物＞
◎「岡村君　本物のクマを　見たことが　ありますか」「おお　ありますよ　ただちょっと　距離がありましたが・・」と書きだして、2.3の場面を思い出した。10年ぐらい前、ＧＷの休暇中に何度か、馬場島（ばんばじま）でキャンプをした。馬場島の正式名称は剱岳青少年旅行村キャンプ場だそうだ。剱岳の早月尾根を登る登山口があるところで、大阪からだと北陸自動車道の立山ＩＣを降りて山の方に車を走らせた終点にある。ＧＷのころはまだまだキャンプ場も雪がいっぱいで、営業をしていないキャンプ場にテントを張ってあちらこちらの山を歩いた。そこに警察官の詰め所があり警察官が常駐していた。なんでこんなところに交番よりやや規模の大きい警察官の詰め所が、と思われるが、山岳救助のためかなと思っている。大阪でも、なんでこんなところに警察官がいつも立っているのかと見渡すと、アメリカ領事館が在ったり、中国領事館が在ったりする。話は飛んだが、そこにいる警察官が望遠鏡をのぞきながら山の斜面を指して「ほれ　あそこ」と教えてくれる先に、「おお　あれがクマか」と推し量るぐらいに小さくゆっくりの草を食んでいた。「毎年　同じところに　出る」「あまり近づくと　危険なので　発砲して　むこうに　帰らせる」それこそ山の斜面の遠いところをウロウロする黒い動物を毎年のように見ていた。

◎澤山さんと二人で11月の下旬に木曽駒ケ岳に登った。下から歩いて登って、反対側に降りようという計画で、飯田線：駒ケ根駅からバスかタクシーで北御所登山口まで行った。途中の看板に、「クマ出没中」と書いてあった。あと1時間ぐらいで小屋に着くころ、真っ白な雪の斜面を黒い大型犬が走り下りている。「なんでこんなところに　犬が」そう思ったがしばらくしてもしや、「あれはクマか」この時も距離は相当離れていた。すごい身体能力、足腰は犬なみ、木登りは猿なみ、腕力や歯は猛獣なみ、クマとはそんな奴だねえ。山小屋は最終日だった。「残っている酒　どうぞ飲んで」と大いにいただき、翌日は中央線のどこかの駅まで歩いて下った。今、検索してみると、相当の距離だ。あの当時の二人は並外れた体力と脚力、苦も無く歩けたねえ。この時は、テント・食料は少ないが、荷を背負い、コースタイムの70%ぐらいで歩いていたのでは、と懐かしい思い出。

◎それ以外に尾根道を歩いていたら、下の方の雪面を円筒の一斗缶ぐらいの黒いやつがウロウロというのも見たことがある。「これがクマの爪痕」「これがクマの糞」「これがクマの足跡」これぐらいは毎年のように見ているが、すぐそこという近さに接近したことはない。ひとりで歩く時は喧しいぐらいに鈴を鳴らして歩いている。「鈴を鳴らすと　いろいろな生き物に遭遇できない」と生きもの好きな方々はおっしゃるが、クマとはばったり遭遇したくはない。

◎本を読んで、「クマ専門の先生　がおられるのか」と驚いたが、驚く方がおかしいのかもね。「ツキノワグマはアジアクロクマ　という名で　近隣のアジアに分布しているらしい」とはいうものの、クマ君にとって日本列島は住み心地がいいらしい。クマの話は，マタギやそれらの民俗学でもいくつか紹介されていたものを読んだ。本の中で先生は、クマがヒトにとって加害者になっている現状を考えている。
◎熊の胆は消化器系の薬として大きな金銭で取引されるらしい、それ故に、熊の胆をめあての各国の漢方薬生産者が、クマを消費しているらしい。
◎日本ではツキノワグマとヒグマは、津軽海峡を境に、本州のツキノワグマと、北海道のヒグマがうまくすみ分けている。これがなぜなのかわかっていないらしい。他のアジアでは、ツキノワグマが他の大型肉食獣、トラやヒグマなどの捕食対象になっているらしい。ツキノワグマが日本に何頭いるのかわからないらしい。2万頭前後と言われているが、2006年4600頭が捕殺された。
◎50万年前の大陸と陸続きのころに、日本列島にやってきた。現在、九州では絶滅が宣言されている。
◎熊の胆：古代、ギリシャやインドから中国へ、そして奈良時代に遣唐使によって日本に渡ってきたらしい。

019　来廊お礼　090319

岡村隆久展に足を運んでいただきありがとうございます。この画廊、シェスタ倶楽部での展覧会はと調べてみますと今回で九回目です。毎年三月の終わりぐらいの週にやっており、岡村と画廊の都合がつく限り、続けていきたいと思っております。

振り返るとこの一年、他の展覧会が入っていなかったので、たっぷり時間をとって絵を描くことができました。ここの会場には大きすぎるかなと思える大きさの絵、小さい絵、中くらいの絵、「よくまあ　次から次に　思い浮かびますねえ」と言われるぐらいに描いたが、さあどれを展覧会の出そうかと片付けてあったものを引っ張り出して、「これはいいねえ」と思えるものもすこしはあるが、「あれれ　これはまずねえ」と落胆させる絵がいくつも出てきました。描いた本人が描きあがった当座、「よし　これでＯＫ」と言ったにもかかわらず、日が経って改めて見てみると、評価がぐらぐらするのは情けない。これを何日か目の前に晒しておくと、「むむ　あの時はＮＯだったが」「これはこれで面白いのでは」ぐらぐらがますますぐらぐらとなり、「本人といえども　いい加減なものだねえ」なんて思っている次第です。

自分の絵を見て、あまり描き込まない、あっさり出来上がった絵がいいと思う。白いキャンバスに一色、二色、三色と、色が的確に嵌まっていく、そこを塗らなければいけないという場所に置かれている、そんな絵がいいと思っている。しかし本当は、欧米人が持っている厚ぼったい、暴れるような、踊るような感性が欲しくてたまらないし、憧れが強い。オレにはこれがないんだと痛感。

今は展覧会が始まる二十日ぐらい前、いよいよ一年ぶりの展覧会が始まるなと楽しんでおります。いつも、「オレは　日常が好きだ」というのは、展覧会があるとその前後三か月ぐらい、描けない、雑用に追われる、人と会わねばならない、とぼやいております。しかし展覧会があると、ぼやきの半面、気持ちが高揚し、精神が凛となり、いいものだけが見え、削ぎ落とし、ほんまものだけが残るように思えるのです。

展覧会は半年とか一年前に会場と日時が決まり、「今度の展覧会は　こんなテーマで　こんな絵を出品しよう」なんて張り切りだす。いつも 3 月なので、新年の賀状はやめ、展覧会案内状を配ることでかんべん願っております。まわりの仲間たちもジジイとババアが多くなってきました。訃報もいくつか流れてきます。

先日、久しぶりにアトリエを訪ねてきた友人が、「あれえ　絵が変わったね　イメージの絵になってきたね」と驚いていた。それを言われると、痛いというか辛いというか、オレ自身はいつも同じ姿勢、いつも同じ感覚で、いつも同じ絵を描いているつもりですが、たしかに変わってきていますね。絵が変化する、画風がちょっとずつ変わるというのは、これはもう、オレの資質だと開き直って描いております。

今、安威川河川敷をゆっくり走ってきていつものところでストレッチ体操をしている。冬が終わりかけ、寒波のころに冷たさはもうない。あの頃はネックウオーマーに暑いジャンパーを着こみやってきていた。冬のモノトーンの世界が、徐々に柔らかく、草がぼちぼち広がり始め、木の枝の先が色づき、風まで春のにおいがする。ベンチの前に昨日もあった、十弁ぐらいの黄色い花が一輪、レモンイエローが輝かしい。

ちょっと暖かくなると、布団を蹴飛ばし、足を冷やしてまたまたヒザが痛い、これは大変とだましすかし、撫でさすっている。山に登った日も、ヒザの裏にカイロを貼ってなんとか無事登れた。これ以上悪くなるなという思いが通じるのか、気温の暖かさが功を奏しているのか、ヒザは治りつつあるが、花粉症がやってきた。鼻たれ、くしゃみ、目がかゆい、これはたまらんと薬をもらいに行った。

020　比良-Ⅰ　140319
◎8：45 歩き始めた。今日は伊藤新道から琵琶湖バレーのスキー場を横に見て、烏谷山（からとやま）から牛コバ、反時計回りに歩きたいと思ったが、まだ雪が残っているこの季節、完走することができないかもしれないと思いながら出発した。茨木からおよそ 2 時間足らずで坊村に着く、先月行ったマキノ高原の赤坂山方面は茨木から 2 時間半かかる。
◎林道を歩き始めてすぐカーブの処、「ここだ　昔の人の　杣道」ということで入った。なんとしょっぱなからの急登、ひーひーは一は一言いながら登った、四つん這いとまではいかないが、三つん這いという言葉があればその体勢、えっちらおっちら登った。見上げると、なんと、ちょっと上にカーブミラーが見える、まさかと思ったが同じ林道に出てしまった。「あちゃちゃ　すげえ　アルバイトを　してしまった」と洒落を飛ばしながら、そぐそばをまわりきった処、次のカーブを登り始めた。
◎帰途に確かめると、伊藤新道と、杣道はさほど離れていない、伊藤新道は谷筋なのに対し、杣道は尾根道、いきなり上の池に到着する、伊藤新道は白滝山を経由して池に到着する。
◎この杣道は歩きやすいと登り始めた。昨日雨が降ったのか、全部が濡れている、地面が水を含み、草も枝も葉も水滴が着いている、水滴を手で払いながら思った、「露払い」という言葉知ってはいるが、なるほどこういうことをいうのかと改めてその意味をかみしめた。
◎この杣道も、伊藤新道同様なかなかの急な登り、1 時間登ると北山という小さい標識、695Mと書いてある。池のあたりまであと 300Mの登りだ。
◎杣道は登山地図には載っていないが、ところどころに赤いテープが見える。今日はまったく人とは会わないが、季節がいい時には、どなたかが歩いているようだ。
◎2 時間で池までやってきた、左先にポコリンと白滝山 1022Mが見える。雪がでてきた、雪は深いところで膝ぐらいまでありそう、ここでワカンをつけることにした。
◎池は凍って真っ白、雪の白さの中、白く凍った池は間違って進みそうになるが、氷の厚みはどれぐらいなのか、間違っても近づいてボソリ氷を踏み抜き靴を濡らす、ひっくり返る、なんてことはこの寒さでクワバラである。オトワ池、カシラコ池、スギヤ池、長池、と地図に名前が載っている。千年以上も前から地元の人が登ってきた山の上の涼しげな池だったのだろう。やってくるのに 2 時間か 2 時間半、フーフー言いながら登ってきてこの池を見ると、これが桃源郷かなと思わせる涼しげな爽やかさがある。いつ来ても素晴らしい、オレのお気に入りの場所である。
◎高架鉄塔の下を歩く、このあたり、雪の深さは 50～70 センチぐらいかな、ワカンをつけ一歩一歩沈み込まないように歩く。倒木や岩があるところに穴がある、そこにズボリ足を突っ込むと、ひざまで足の付け根まで入り込み、ワカンが引っかかってなかなか抜けない、エッコラサである。
◎山の麓の村の中は新芽が芽吹きだし、草が青さを増して少しずつ伸び、小さい花が咲き始めている。1000 メートル上に上がってくると、雪がまだまだべったり大地を覆っている、いくつかある池も凍ったまま、針葉樹の黒い緑は冬に負けずシンとしている、葉が落ちた樹々は冬のまま、枝先の色づきも膨らみも感じられない。麓に比べーヵ月時間が遅れているのかな。
◎上り下りを繰り返し、氷が張った池のふちを歩き、斜面を登る。「これは池じゃないよね」というところ、思い切って進んだ。ピッケルで突くと水っぽい氷の下までズボリ刺さる。ええい行けとそろり歩いた、無事通過できた。ここの高架鉄塔の電線、琵琶湖バレーのスキー場に電気を運ぶための電線のようだ。琵琶湖側から電気を送る方が近いように思うが、なんらか事情があるのだろう。
◎11 月に来た時に比べ、雪の山は景色が一変する。雪がまだ降っていないあの時は、ずっと向こうまで道が見えたが、今は登山道がまったく見えない、赤いリボンもそう度々はない、地図と磁石をにらめっこ、あの山が目的の森山岳じゃないかな、道らしきものがある、なんだか陽が差してきた、どんより曇り空が明るく雪の上に影を作り出す。陽が当たると雪景色も輝きだす。

021　比良-Ⅱ　150319
◎かすかに緑色を感じさせる小さい風船のような球、ゼリーのお菓子かな、パチンコ玉ぐらいの大きさが雪の上に落ちている。拾ってつまむと中に黒い目のようなもの、透明な糸をひいている。カエルの卵のような小粒の風船はヤドリギの実らしい。ヤドリギはこの冬の中、樹々が葉を落とし枝だけになった今、樹々の太い枝のあちこちに、丸い大きなボールのように宿っている。多くの動物たちが葉や新芽、実を食べる、鳥はそこで休憩したり巣を作ったりするそうだ。鳥は実を食べ糞と一緒に種を出す、粘った糸が鳥の羽に引っ付き次の木に着生する。
◎1：00 森山岳てっぺんに到着。ポコリン真っ白、なだらかなこぶの上、標識も何もない、誰かが書いた小さな赤い板に森山岳 1080Mと書かれている。南東の方角すぐにスキー場が見える、音楽が聞こえてくる、若者の喊声が聞こえるような気がする。大きな建てものが見える。
◎持参のおにぎりと菜の煮たものを持ってきたが、袋の中で汁がこぼれている。山の弁当は汁がこぼれないようにしないといけない。山で食う昼飯は美味い、量は多少減ってきているが、美味しくたいらげた。
◎さあ、ここからスキー場のゲレンデ下まで行けば帰路だ、と道なき雪面を歩いた。目の前に人がたくさんいるスキー場が見えると思いながら下って上った。まずひとつ目の渡渉、石を踏んで渡れそうなところを探し、一つ二つと渡って、目の前の急な雪の斜面を登った。登り切って、今度はワカンをはずして急斜面をまた下った。ワカンをはずさないと急な斜面の上り下りはむつかしい。「うわあ　やれやれ」2：20 汁谷に着いた。ここも渡渉かと思ったが、スキー場内は川に蓋をしてあるようで、大丈夫かなと思いながら苦もなく渡れた。
◎11 月末にこのあたりに来ている。その時は道がわからず、汁谷から、夫婦滝、牛コバへと歩いた。4 時に牛コバに着かなければ暗くなって危険だと大いにあせって歩いた。雪がないときはどんどん進める、雪があるのと無いのとではスピードも体力の消耗も違うものだと今さらながらに痛感。ここから縦走路、烏谷山まで進んでＴ字路を左に曲がり、牛コバまでに暗くなる前に着きたい、暗くなるのは 5 時半ぐらいか。
◎汁谷にはスノーボードの人たちが上からどんどん滑り降りてくる。彼らもこちらには関心がなさそう、オレも、疲れているのとスキー場の喧騒が嫌で、楽しそうな若者たちがまぶしかった。さあ、ここからまた雪の上り下りの道、木戸峠から縦走路だ、荷を下ろしてワカンを着けた。疲れていない時は簡単に装着できるワカンが、なかなか上手く装着できない、身体が曲がらない、息が切れる、やっとのことで装着成功である。
◎4：15 烏谷山 1076Mに到着した。11 月には走るように歩いていた、さほど疲れていなかった、今日はなんだかバテバテのようである。最初の 2 本 3 本の急登がひびいてきている、池までのがんばりがひびいてきているようだ。お菓子を食べ、ゼリーを食べ、元気をつけた。
◎今日はよくひっくり返る、つるりんこ、ころりんこ、大きなおっさんが雪の上で、斜面で、おおいにころころである。昨日の雨で湿っている、雪が緩んで湿っぽい、身体が疲れてきている、10 回以上はころころである。すってんころりんは若いころからあった、思い切ってころぶと怪我は少ない、本当に危ないところは恐怖症のオレ、なかなか慎重になっている、三点確保でそろりと歩く。
◎烏谷山から摺鉢山 1006Mまでなだらかな尾根道の下りだ。11 月には汁谷から夫婦滝を越え牛コバに帰った。今日は雪の尾根道、このあたりでワカンを外した。一二度道しるべのりボンが見つからず右へ左へ迷った。徐々に薄暗くなってきた、11 月の時は 4 時には牛コバに着きたいと焦ったが、今日は 5 時半には牛コバに着きたいと内心焦っている。急な斜面で何度か尻もちをつきながら歩いている、川の流れが聞こえてくる、あれが聞こえてもまだまだ 30 分はかかるだろうと思いつつ、左手に川が見えた。降りてきた、明るいうちの降りられた、牛コバの林道に降りたのが、5：45、まだ少し明るい。
◎牛コバにあるパイプで水を汲んだ、ここの水は湧水か川の水かわからない、山で湧水の美味さは身に染みる、「そらあ　美味い」ものである。川の水もごくごく飲む、ゴミがあっても平気で飲んでいる。
◎6：30 車に到着。おおいに歩いた、おおいに疲れた、おおいに満足。8：45 から 6：30 まで、9 時間足らずの山行、ジジイにはいささかしんどい山だったが、予は満足じゃ、たか笑いの気持ちである。車で 2 時間の帰路、汲んだ水を飲みほし、最後の食糧をぼそぼそ食った。雨が降ってきた、山で降られなくてよかった。

022　来廊お礼Ⅱ　180319

展覧会の案内状に切手を貼ってどっさり送った、毎回5枚10枚、「あて所に尋ねあたりません」と赤い印が押されたはがきが返ってくる。転居され、追跡不可能な方がほとんどで、我が住所録から名前だけは残し住所を消す。中崎宣弘の場合、娘ですという方からメールが入った。「父は　2年前に　他界しました」という簡単な内容だった。2年前にも、「父は　他界しました」というハガキが来て、新庄谷君の訃報を知った。

中崎さんは、六歳年下、絵を描くデザイナー、その早い死に驚いた。彼から本をいただいた、「旅とデザインウイスキーから人　空間構想へ」という題名の厚い本、「さあ　舞台が始まった　真っ暗だった舞台に」という文言が目に留まった、それにオレがつけたした。「一条　二条　三条　光が降りそそぎ　色が舞う　赤に黄に青に透過三原色が舞う」彼を紹介してくれたのはステンドグラス屋の社長、「いいデザイナーがいる」と図案を見せてくれた。「たいしたことないじゃないか」嫉妬交じりにその図柄を見ていたのが今から思うと微笑ましい。30歳代の当時、大阪南の大きなクラブの天井一面に造るステンドグラスの下絵を描いた。「一発で決まった」と即施工にかかっていたが、画料はいくらか忘れた、たぶん安かったと思う。その後いくつか頼まれたが、いい図柄ができなかった。

新庄谷君は、二十歳ごろの知り合いで、一緒に大阪市立天王寺美術研究所で石膏デッサンを描いていた。その後彼は、デザイン事務所に丁稚奉公に入り、内装デザインを仕事にしていたようだ。ようだという曖昧なことを言うのは、彼の仕事を理解してやれなかった。話下手、説明下手なのか、酒を飲んで、激高し、声高に話す内容が理解できなかった。吉谷君のお好み焼き屋の内装を手掛けた時は、吉谷がいたく文句を言っていたが、「それなりに　できているのでは」と思っていた。「久しぶりに展覧会を覗きたかったが　入院していた　次回はぜひ」という手紙が来て、「おお　元気になれ　次回是非」とハガキで返したのが最後になった。

デザイナーという人種の方々とは、中年以降になって何人かと知り合った。話をすると言っても仕事の話はなく、真剣に仕事の話をするわけでもなく、ただ世間話で笑いあっていた。おおよそ流行に敏感で、格好がいい服装に洒落た会話をして人を唖然とさせている。作品のコンセプト、クライアントに対するプレゼンテーションのやり方、その制作過程、何もかもが格好いいが、ならばと、できたものを見ると、「なんだ　たいしたことがないじゃないか」というものも多かった。ただ絵描きと違うところ、これは金銭の動きだ。金銭が絡まないと仕事はしない、デザインの仕事自体が有料作業だ、話す、スケッチを描く、これが有料なんだ。

さあ、展覧会までもう一週間を切った、あと、することは、「額装に　パーテイの準備　いろいろな小物を用意しなければ　ええい　じゃまくさい　どうでもいいじゃないか」なんて投げ出すわけにもいかない。ところで、今一番楽しい作業は、たくさん描いた絵の後始末、「もうこの絵は展覧会には出品しない　お蔵入りだが　その前にちょっと修正をしておこう」と決めた絵を順次手直ししている。修正・修繕と言ってもこれはなかなか難しい、「修正はワンポイントがいい　全面的に　と　思ったら全部が　なくなってしまう　完成と思った時点の感性は　瑞々しい　その爽やかさを残しつつ　完成に近づけないと全部がつぶれてしまう」いろいろ能書きを垂れながらこの修正作業が楽しいのである。やはりオレは、描くことが一番好き、好きなことをしておればご機嫌、わくわくしながら、どきどきしながら、この作業が面白いので個展の準備作業が疎かになってしまう。

中崎さんの本を見ながら、「オレも　ホンを作りたいなあ　画集が欲しいなあ」と思った。絵描きの画集なぞ、絵を並べるだけ、ちょっとした能書きを入れるだけ、それでもいいから作ってみたいものだ。それともう一つ、筆で描く文字（書ともいう・・）をやってみた。墨汁を出し、和紙を出し、書いてみた、字を書いてみた、鉛筆のように筆先をもってひらがな交じりの文章を書いてみた。いやあこれも楽しい。

023　絵解説　240319

今日、日曜日に展覧会搬入、飾りつけをしてきた。例年、土曜日にやっていたが、アトリエに描きに来ているミカさんが、「手伝ってあげる　いつもやっているので　けっこううまい　役に立つ」と言ってくれた。いうだけのことはあって、飾りつけが 2 時間強で終わってしまった、感謝である。「あいているのは日曜午前」というので、朝、8 時半に迎えに行き車を走らせた。絵・工具・包装紙・カメラ・パーティ用品・・それらは前日に車への積み込みが終わっていた。高槻の寿永コミセンに近いところ、「ここから　どの道を行けばいいのかな」とナビに聞けば、「長柄橋のそばを通れ」という。30 分で画廊に着いてしまった、さすが、ナビ君なり。

◎310818-40：この何年か、お気に入りのスタイルの絵「わたしはわたし」です。展覧会の案内状は三四ヶ月前に作らなければなりません。「今回の展覧会の案内状はこの絵でいこう」と選んだ。迷った末にこの絵にしました。若いころは気にいった絵がなく困ったものですが、迷うほどにたくさん候補があるのも、うれしい困ったものです。印刷屋に発注をして、色合わせを終え 1500 枚がやってきました。

◎171118-40：この何年か、お気に入りのスタイルの絵「わたしはわたし」です。この形は、オレ自身が造った独自の象形、象形文字だと思っています。漢字で、「馬」という字が、馬のかっこうから作り出された字だとだれもが知っている、あれですよ。オレにとって、「わたしはわたし」は、この形象なんですよ。古代の壁画に刻まれた絵やら模様やら、あれもゾクゾク感じますね。

◎261018-40：この何年かお気に入りのスタイルの絵「わたしはわたし」です。　“ひと”の絵をいくつも描いてきた。ひとの形、形態に興味があって、“ひとが　なにかを　している”という絵を描いてきた。「もう　ひと　形に　こだわらなくても　いいかな」と思うようになってきた。線であり、面であり、具象の形が薄くなってきた。

◎301018-40：オレ、青色絵具は何色持っているかなとかぞえた。セルリアン・コバルト・ウルトラマリン（フェルメールが愛用した金より貴重なラピスラズリの現代化学の色）そして透明色のフタロ、それぐらいですね。昔は、ピーコック（孔雀からとった名称）・ターコイズ（トルコ石）・プルシャン・インジゴ・地中海ブルー、これらの青色も買ったことがある。

◎300818-25：「ダンスダンス」と名付けていますが、立つ、走る、踊る、を感じてください。絵の中で色が形が、それぞれが、かってなスタイルで、かってに動いています、かってに叫んでいます。若者の溌剌ダンスもいい。ジジババのノタクラダンスもそれなりに面白いのでは。

◎151218-25：「人が踊る」と聞いて何を想像しますか、「そう　その踊りです」　どういう姿態で、どういう体つきで、空間が埋め尽くされるのか。どういうテンポで、どういう音にのって、時間が流れていくのか。「おなじアホなら踊らにゃ、そんそん」オレ　こんど山に行ったら、「踊るぞ　暗黒舞踏　土方巽だねえ　田中眠だねえ」

◎160119-20：自転車の絵もたくさん描いた。時には自転車がバイクになったりもする。緑のなか、水のそばを走る。風が顔に当たる。大きな木が、小さい山が、見え隠れする。オレ自身は俗にいう“ママチャリ”と呼ばれる普通の自転車で、あちこちを動き回っている。「え　そんなところまで　自転車で行くの」と驚かれるぐらい遠出している。好きな場所は川の河川敷だ、急坂がないからね。

◎030918-25：「ダンスダンス」絵を描き終わると、日付とサインを入れます。日付は日・月・年の順番に入れます。二十歳代に見た、“ホルスト・ヤンセン展”（ドイツ 1929～1995）デッサンのうまい絵描きでした。サインの横の日付の書き方を見て、これを真似しようと、それ以後続けています。サインは TAKA と書いています。それと写真撮影の話、フィルムカメラで撮影していましたが、地震でカメラが潰れたのと、デジタルカメラの現像が上手くなったので、今はデジタルです。

◎171218-20：えかきに色は日常茶飯事のこと、まわりにいつも在って当然のもの。絵、なんて、大仰に申しますが、小さい画面の中に、色と形が、組みあわさっているだけです。色と形が、うまい具合に配置されていればいいのです。赤色はよく使います。黄色っぽい赤、あかあかしい赤、渋い赤、踊る赤、粘りつく赤・・。絵の具屋に行けば百色以上の絵の具が並んでいるが、オレが使うのは二十色もないねえ。

024　展覧会　310319

一週間の展覧会が終わった、「いやあ　終わった　つかれた」の一言。まず今回の展覧会は天気が良かった、ほとんどの晴れていた、最終日に傘を持った人が何人かはいたが、「パラリときた　ちょっと降ってきた」という程度でみなさん帰る時には、「傘を忘れないよう」とつぶやきながら手に持って帰られた。搬出時は少し降っていたが屋根の下、帰りの道中は車のワイパーは回っていたが、家に帰り着いたころには雨が上がり、車から荷を下ろすにも雨に降られることはなかった。ちまたでは花の話、桜の話でいっぱいだけれど、「オレは　展覧会　それどころじゃあない」という状態。例年この季節、春の訪れ、花が咲きだすこの季節は、花を横目に歩いている。

正月ごろから元気印の次女、36 歳、独身が、「足がおかしい　歩けない」と家にやってきた。車いすを利用しなければならない状態、手にも痺れがあるという。高槻の医大病院、阪大病院などへ何度か通い、MRI 検査の結果、阪大病院へ緊急入院、「脊椎炎」という診断ながら、原因も、確実な治療方法も、その後のこともはっきりわからないらしい。カミさんは目が見えなくなりつつあり、娘が歩けない、二人の身障者を抱えオレは右へ左へ走り回り、展覧会以外の活躍もしきり。

今年は観客数が少なかった、実入りも少なかった、画廊経費ぐらいしか売れなかった、これには残念。オレの展覧会を見るのは初めてという方が少なかった。初めて来たという方々は、ういういしくオレの絵に接して喜んでくれる。展覧会などと照れながら、義理で来たと戸惑いつつも我慢して見てくれる方もおられる。さまざまだけれども、オレの方もあちらからこちらからいろんな方向から絵の説明をして、「如何ですか　楽しんでもらえますか」というようなことを言って多少とも話が弾む。もう何度も岡村展は来なれ、「土産を持ってきたぞ　お前の絵はわかっている　お前に会いに来てやったぞ」どかり腰掛、昔話に花が咲く。先日亡くなった 90 歳の O さんは、杖をつきながら、「もう来年は無理かな」と言いながら 2.3 年来ていただいた。オレは 72 歳、まだ山に登れるぐらいに元気だけれど、体力が弱ってきた方、病気をして療養中の方が増えてきた。今回特に感じたのは、病気の話が多かったこと。来られるなり絵の話はそっちのけ、「実は・・」で始まり、病気の発見時の話、どこの医療機関でどんな検査をして、病名が宣言され何度か行きつ戻りつつしつつ、いろいろな治療が施された話。その甲斐あって、「やっと　治ったの　治らなかったの」皆さんご自分の病気の事をこまごまと報告をしてくれる。いつまで話が続くのかと閉口するも、そんな時に限って扉を開いて入って来てくれる方がいない。

搬入も搬出も絵を車に乗せて運んでいる。アトリエの絵を、看板を、カメラを、車をに積み込み、展覧会の会場まで運ぶ。かつて東京での展覧会も車で運んだ記憶がある。画廊の壁に持参した絵を並べ、「ああでもない　こおでもない」と右へ左へ並べ替え、まずはそれぞれの絵の場所を、配置を決める。それらを壁に吊って飾っていく。最近お気に入りの絵、二枚のキャンバスを組んで一枚の絵にしたモノが三点ある、この二枚組の絵を裏に板を添えて歪みがないように合体する作業、キャンバスを吊る金具をつける作業を始める。その間に搬入を手伝ってくれる B さんが、小さいサイズの絵を吊り始めている。「大きな絵は　二人一組で　吊りましょう」絵を吊り金具につけてもらい、オレはうしろで、「右　1 センチ上げ」「左　3 ミリ下げ」なんて声をかけ、徐々に飾り付けが進んでいく。全てが吊り終わったら、画廊全体の写真を撮り持ち帰って、絵の解説書、「キャプション」を作って初日に持ってくる。初日はキャプションを絵の横に貼り付け、芳名録、来廊お礼の文章、などと一人でやっていると、画廊オーナーがやってこられる。今回は、まだ展覧会が始まっていない前日に、飾りつけの最中に旧知の I さんがやってこられた。「ややや」と挨拶したが、日を間違ってこられたようだが、30 分ほど絵をご覧になって帰られた。二日目は定刻より 40 分早い朝に画廊に急いでいると、ドアーの前に到着した人影、W さんだった。最終日ほとんど片付け終わって、絵を車に積み込んでいる時に、ひょこひょこ 90 歳代の M さんがやってきた。「・・？」「え　日　間違えた・・！」金曜日の 1000 円パーティの日だと来られたが、パーティどころか絵も見てもらえなかったのは気の毒。車に絵を積み込み画廊をあとにして雨の中を走って帰った。